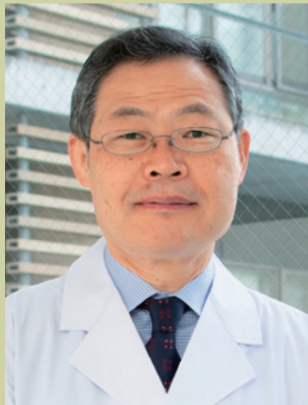


● 教室（診療科）の特色 ●

当科は、上部消化管、下部消化管、肝胆膵、乳腺、小児外科、そして今年度新設された機能改善外科（肥満外科、各種ヘルニアなど）の6診療グループからなります。それぞれの診療グループは、経験豊かな専門医で構成されており、最先端医療であるロボット手術からアップ・ヘルニアまでの幅広い疾患をカバーする外科診療科であることが特色です。李教授が教室を統括し、岩本特任教授、富山准教授、朝隈講師、米田講師などが各専門領域の外科診療を担っています。

一般・消化器外科学教室教授



李 相雄(り そうゆう)教授(科長)

- 専門分野
食道外科、胃外科、内視鏡外科、外科代謝栄養、医学教育
- 職歴 平成7年 大阪医科大学卒業
令和4年 現職
- 主な学会／専門医資格
外科専門医、消化器外科専門医
消化器病専門医、消化器内視鏡専門医、食道外科専門医
- 研究課題
低侵襲外科治療、外科医教育

乳腺・内分泌外科



岩本 充彦(いわもと みつひこ)特任教授(科長)

- 専門分野
乳腺
- 主な学会／専門医資格
日本外科学会 専門医
日本消化器内視鏡学会 専門医
日本消化器病学会 専門医
日本乳癌学会 乳腺専門医 乳腺指導医

一般・消化器・小児外科



富山 英紀(とみやま ひでし)臨床准教授

- 専門分野
小児外科学
- 主な学会／専門医資格
日本外科学会専門医
日本小児外科学会専門医
臨床外科学会
小児外科学会評議員
近畿外科学会評議員
小児外科近畿地方会評議員

● 初期研修プログラムの特徴 ●

臨床研修医は、6診療グループを月単位でローテーションして、バランスよく総合的な外科診療を身につけることができる教育プログラムとなっています。術前・術後カンファレンスを通じて、診断技術や治療方針に至る過程を経験し、プレゼンのノウハウも丁寧に指導します。外科教育に熱心な指導医の下で、安心して外科手技を経験でき、自ら執刀する機会もあります。いわゆる「外科」に興味をもつ臨床研修医が、当科での経験を通して、将来のキャリア形成につなげていけるように支援します。

● 教室（診療科）指導医・上級医 ●

氏 名(職 掌)	専 門 医	研究課題等
岩本充彦(特別任命教員教授)	外科専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡専門医 乳腺専門医	乳腺外科
富山英紀(准教授)	外科専門医、小児外科専門医	小児外科
朝隈光弘(講 師)	外科専門医、消化器外科専門医 消化器内視鏡専門医、胆肝膵外科高度技能専門医	胆・膵疾患の外科治療
米田浩二(講 師)		
木村光誠(講 師)	外科専門医、乳腺専門医	乳腺外科
他 講師(准)2名、助教7名		

■連絡先：大阪医科薬科大学 一般・消化器外科学教室 TEL:072-683-1221(内線2361)

■ホームページ：<https://www.ompu.ac.jp/u-deps/sur/>

一般・消化器・小児外科

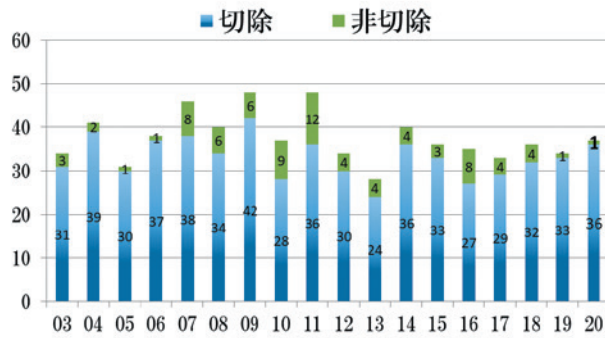
上部消化管班(食道・胃)

一般・消化器外科 上部消化管グループでは、食道がん・胃がんといった悪性疾患を中心に年間約200例の手術を行っています。最近では約90%を胸腔鏡・腹腔鏡手術で行い、患者さんの体への負担が少ない手術を実践しています。鏡視下手術の強みである拡大視効果を生かした精緻なリンパ節郭清、安全で確実な消化管再建にこだわりを持って取り組んでいます。手術支援ロボット「ダヴィンチ」を用いたロボット支援下手術や高度肥満症に対する腹腔鏡下スリーブ胃切除といった最先端の外科手術も行っていきます。研修に来てもらった際には、チームの一員として積極的に手術に入っていただきます。糸結び、縫合など基本的な手技に始まり、低難度手術の術者、中・高難度手術の助手・スコピストなど習熟度にあわせて取り組んでいただきます。

外科医としての考え方、術後管理もチームとして大切にしている部分です。外科手術という手術侵襲から早期に回復するための管理や消化管手術後の栄養管理についても学んでいただきます。患者さんにより良い医療を提供できる医師としての下地を学べる環境作りを大切にしています。

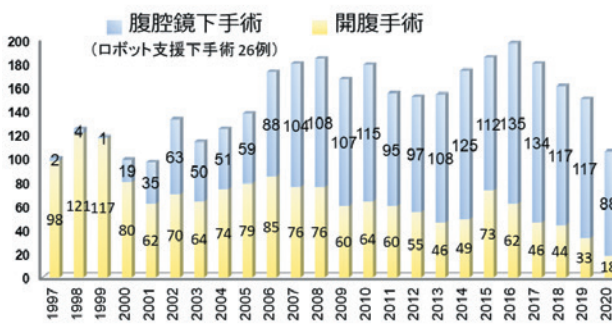
カンファレンスでの術前症例検討におけるプレゼンテーションを通して、症例をまとめる能力や実際に発表する力をつけてもらいます。また、チャンスがあれば学会発表や論文発表にも取り組んでいただき、若手の先生のキャリア形成をしっかりとサポートします。

食道癌・咽頭癌症例数の年次推移



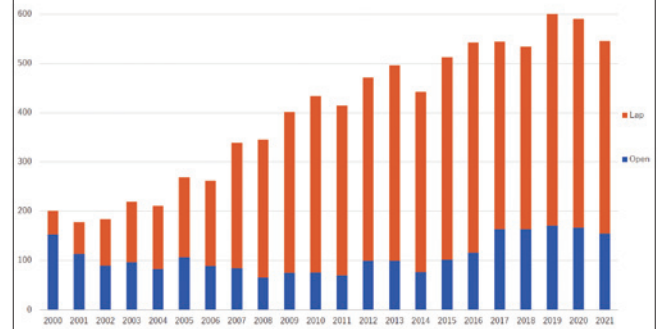
食道癌・咽頭癌症例数の年次推移

胃切除術の年次推移



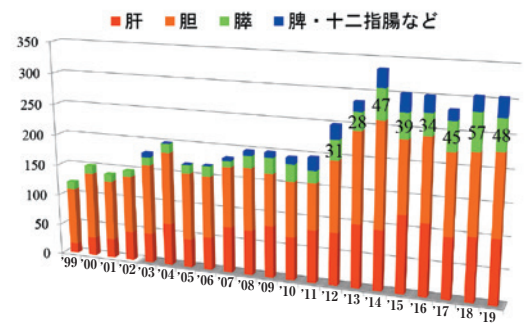
胃切除症例数の推移

下部疾患手術症例数と腹腔鏡施行率



下部疾患手術症例数と腹腔鏡施行率

肝胆脾十二指腸疾患手術



肝胆脾手術数の年次推移

診療(手術)実績 2018-2021

		2018	2019	2020	2021
頸部・胸部	気管切開・閉鎖	2	3	2	4
	漏斗胸	4	3	3	1
	正中頸嚢胞		1	0	0
	胸腔ドレーナージ	3(1)	1	0	2(2)
腹部	腹壁破裂・臍帯ヘルニア	0	1(1)	1(1)	0
	臍ヘルニア	5	10	9	11
	消化管穿孔	7(1)			
	小腸閉鎖症				1
	腸閉塞	2	1		
	虫垂炎	3	8	2	3
泌尿生殖器	胆道拡張症	1	1	1	0
	直腸肛門奇形	0	2(1)	2	4
	ヒルシュブルグ病	0	0	1	0
	鼠径ヘルニア・陰嚢水腫	26	17	23	16
腫瘍	停留精巣	11	7	9	12
	腫瘍(良悪性)	2	0	0	1
その他	カテーテル留置・抜去	7	2	8	8
	ほか	5	4	15	17
合計(新生児手術)		81(2)	67(4)	76(3)	80(6)

研究室

研究支援センタートランスレーショナルリサーチ部門と連携し、手術で得られる試料を用いた橋渡し研究を中心に進めています。

主なテーマ

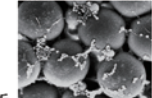
- 医工業連携によるmicroRNA創薬研究
- 手術関連試料由来、細胞外小胞の機能解析
- 手術試料を利用した、新規がん遺伝子の同定解析
- 臨床を反映した動物モデル作製研究
- 手術デバイス開発研究、他

主な研究施設

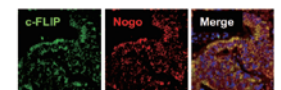
学内: 生理学教室、解剖学教室、生化学教室、創薬医療教室、研究支援センター 実験動物部門、TR部門

学外: 岐阜大学大学院連合創薬医療情報研究科、大阪医科大学機能分子創製化学研究室、大阪大学大学院薬学研究科創薬化合物ライブラリー・スクリーニングセンター、他

胃液中Extracellular Vesicles



Int J Mol Sci. 2019



Nogo-Bのc-FLIPを介したアポトーシス制御機構
Biochim Biophys Acta Mol Basis Dis. 2018

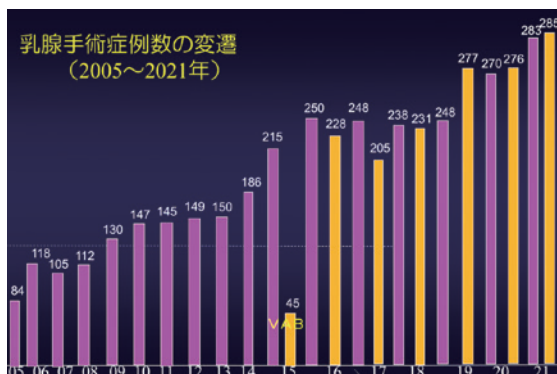
乳腺・内分泌外科



乳腺・内分泌外科
木村 光誠 講師

当診療科では主として乳がんを中心とした乳腺疾患を担当しています。乳がん治療では手術療法のみならず、化学療法、内分泌療法、分子標的治療などの薬物治療を乳がんのサブタイプに応じて適切に行う必要があり、当診療科では最新のEBM(Evidence Based Medicine)を積極的に導入した治療を提供しています。また、乳房再建、放射線治療や緩和医療も必要であり、形成外科、放射線腫瘍科、緩和ケアチームと密に連携しています。そのため乳がんに対する一貫した治療を経験し、学習する環境が整っています。

【手術経験】年間の手術症例は乳がん症例約280件、吸引式乳房組織生検(vacuum assisted biopsy ; VAB)が約300例です。また外来での化学療法施行は年間のべ約1000例です。手術は助手のみならず、指導医・専門医の管理のもと積極的に執刀を経験してもらっています。



【認定医、専門医資格取得】日本外科学会専門医、日本乳癌学会認定医、専門医資格を目標とします。当科での経験が必要症例数などは容易に達成できます。

【学会発表、論文作成】国内、国際学会にも積極的に発表、参加しているため発表の業績も容易に取得できます。また学会出張の際の金銭的補助が受けられるシステムも確立しています。さらに研修期間中に論文作成ができる様指導しています。

【臨床研究】臨床研究にも積極的に参加しています。当科を主管とする多施設共同研究も展開しており、最新の情報をもとに先進的な治療にも取り組んでいます。

【女性外科医】女性外科医には結婚、出産を目指すのはもとより、出産後も仕事の継続が叶う様、サポート体制を整備しています。

【チーム医療】手厚いチーム医療を実践すべく、様々な診療科の医師(形成外科医、放射線治療医、緩和ケア医、病理医など)・看護師・薬剤師等で合同カンファレンスを定期的に開催しています。

初期研修プログラムの特徴

外科における初期研修の目的は、①一般外科および消化器外科疾患の検査所見の読影と診断手順の理解 ②手術適応の判断と術式の決定 ③手術内容と助手の役割の把握 ④基本的な外科手技の習得 ⑤適切な術前・術後管理の方法 ⑥終末期患者やその家族とのかかわり方、などの外科臨床の実際を学ぶことにあります。

一般・消化器外科 臨床研究

2年間の研修期間中に学会発表、論文発表を少なくとも各1編行うこと。

研修病院群

市立ひらかた病院／北摂総合病院／高槻赤十字病院／鳳胃腸病院

評価方法

大阪医科薬科大学外科臨床研修プログラムに基づいて所属班の指導医(班長)により随時評価を行う。



実習風景

週間スケジュール

月曜日	手術
火曜日	症例検討カンファレンス、病棟回診、外来診察、検査、抄読会
水曜日	手術
木曜日	症例検討カンファレンス、病棟回診、外来診察、検査
金曜日	手術
土曜日	外来診察

大阪医科薬科大学病院外科専門研修プログラムの特徴

大阪医科薬科大学病院を基幹施設として一般・消化器外科学教室（一般・消化器・小児外科／乳腺・内分泌外科）胸部外科学教室（心臓血管外科／小児心臓血管外科／呼吸器外科）と23連携施設により専門研修施設群を構成します。本専門研修施設群では専門研修指導医が専攻医を指導し外科学会専門医取得を目指します。

一般・消化器外科 臨床研修

＜専門研修1年目＞

各診療チームのローテーション研修（12ヶ月）

上部消化管、下部消化管、肝・胆・膵、乳腺、小児外科の5つの診療チームを数ヶ月ずつローテーションしながら、診療チームの一員として10～20床を受け持つ。ローテーションする診療チームとその順番は、専門研修指導医が決定する。各診療チームは一人の班長と数名の班員で構成され、専攻医も各班の一員として入院患者の担当医となり、班長の指導のもとに患者の診療にあたる。この間、診療、各種診断法、周術期管理および手術基本手技の修練を行う。原則として全受け持ち患者の手術に参加し、主として助手を務めるが、各個人の経験と技能に応じてヘルニア、虫垂炎、胆石症などの術者となる。

専攻医は専門研修指導医の指導のもとに診療に従事するが、同時に臨床研修医の指導にもあたる。また週1～2回当直にあたるが、緊急時には適宜専門研修指導医に報告しその指導を仰ぐ。

経験症例200例以上（術者30例以上）

＜専門研修2年目＞

後述する当科の連携施設の1ないし2箇所に出向し、引き続き臨床経験を重ねる。出向する病院は、本人の希望も聞きながら、最終的にプログラム責任者が決定する。手術においては術者あるいは第一、第二助手となる。各種検査（消化管内視鏡検査、レ線造影検査）も担当し修得する。

さらに1年の研修を含めて日本外科学会の外科専門医受験資格が取得できるように症例経験を重ねることを目標とする。具体的には、以下に示す「外科専門医修練カリキュラム」に定められた最低手術経験数の2／3を経験することを目標とする。

経験症例200例以上（術者60例以上）

＜専門研修3年目＞

3年目は大学病院での臨床研修を胸部外科学教室出向も含めて行い、連携施設に出向して実務経験を蓄積して、日本外科学会専門医制度のカリキュラムに定められた手術経験数に留意し、その数が経験できるように配慮する。

主に1、2年目の不足症例に関して各領域をローテートする。

経験症例200例以上（術者100例以上）

研修内容と到達目標

それぞれの症例を詳細に検討することによって専門的な知識ならびに技術を修得する。

日本外科学会専門医制度のカリキュラムに定められた手術経験数を経験できることを一義的な到達目標とする。

消化器疾患、乳腺疾患の外科治療、管理を経験し、その中から次に進む専門医へのコースを決定する。

消化管および腹部内臓	50例
乳 腺	10例
呼吸器	10例
心臓・大血管	10例
末梢血管（頭蓋内血管を除く）	10例
頭頸部・体表・内分泌外科	10例
小児外科	10例
外 傷	10例
鏡視下手術	10例
計	130例
術者として	120例
最低手術経験数	350例

プログラムに参加する連携施設（消化器外科領域）

藍野病院／大阪医科薬科大学三島南病院／大阪南医療センター／
大津市民病院／鳳胃腸病院／革島病院／こだま病院／城山病院／
仁泉会病院／蒼生病院／第一東和会病院／高槻赤十字病院／谷川
記念病院／中林病院／北摂総合病院／市立ひらかた病院／豊中敬
仁会病院／守口敬仁会病院／八尾総合病院

取得できるサブスペシャリティ

消化器外科学会 専門医

消化器内視鏡学会 専門医

消化器病学会 専門医

大腸肛門病学会 専門医

肝臓学会 専門医

乳癌学会 乳腺専門医

大学院における研究活動

教育・研究指導方針

“臨床能力の高い臨床医の育成”が本学開学時の目標とされたが、教室の大学院の指導方針もまさにそれに尽きるといえる。末梢血管外科疾患も一部に取り扱っているが、現在の対象疾患の殆どは胃、大腸、食道など消化管、肝胆膵、乳腺などのがんである。

“臨床能力の高い外科医の育成”には各領域それぞれの専門知識と高い手術技能を持った指導医のもとで、手術を主体的に体験させることが肝要であるが、外科専門医取得に求められる臨床技能と専門知識を習得させることを目的としている。同時に、関連領域の研究テーマの遂行とその成果の取りまとめ、学会・文献発表を必須としており、学位取得につなげている。

現在の研究テーマとその概要並びに展望

①李 相雄 教授

②上部消化管がんに対する臨床研究

消化管のがんに対する低侵襲外科領域の進歩は現在急速に進んでおり、近年それに対するevidenceも蓄積されてきている。特に腹腔鏡手術での手術器具・機材は世界中で考案されておりそれに伴い手術手技も以前と比べ日々変化してきている。当教室では新しい手術器具を用いた安全性の検討および従来の手技との比較を行っている。さらに新しい手技を用いることにより術後の回復やQOLを明確に数値化することに取り組んでいる。臨床と研究とを同時に行うことにより良い医療を直接患者様に提供できるよう目指している。

③臨床と基礎のトランスレーショナルリサーチ

当科では基礎医学の研究を臨床応用に活用し、また臨床で得られた情報やアイデアを基礎研究にフィードバックすることで臨床と基礎の密接した医学研究に取り組んでいる。具体的には1)直腸がんに対する放射線治療効果判定の新規バイオマーカーの開発、2)肝硬変、脂肪肝炎のメカニズム解析と新規薬剤の開発、3)乳がんにおけるプロテオミクス手法を用いた新規関連タンパクの検索、4)がん抑制マイクロRNAの検索と臨床応用、などの研究を他大学や企業、基礎医学教室と連携を取りつつ大学院生を中心に研究に日々励んでいる。Bench to Bed, Bed to Benchを合い言葉に、自然と人が集まる活気のある研究室を目指し、より良い医療を患者様に提供できるよう研究に取り組んでいる。

②濱元 宏喜 助教(大腸班)

2020年のデータでは、がん死亡数順位において大腸がんは女性で1位、男性で3位となっていますが、手術できる状態で発見された大腸がんの5年生存率は80%近くになります。つまり、大腸がんは手術で治る可能性の高いがんの1つといえます。

大阪医科薬科大学の大腸チームでは年400例の大腸がん手術の90%以上を腹腔鏡手術で行い、患者さんの体への負担が少ない手術を実践しています。また、肛門に近い直腸がんに対して、根治性と機能温存のバランスに留意して手術を行います。他院で肛門温存は難しいといわれ当院へセカンドオピニオンに来られた患者さんに対しても、手術前に化学療法を施行することで腫瘍を縮小させ、可能な限り肛門温存出来る工夫を行っています。最近では手術支援ロボット「ダヴィンチ」と肛門から手術を行う「TaTME」を同時に行うハイブリット手術を導入し、手術時間の短縮と根治性の両立を図っています。大腸チームではそういった最先端の手術を患者さんに提供するとともに若手の先生にも積極的に手術を行ってもらいます。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は

動かじ。」という山本五十六の名言があります。まずは上司が手本となる手術を「やってみせ」、それをきちんと言語化して「言って聞かせ」、若手の先生に「させて」、うまくいけば「褒める」というプロセスで早く手術が上達できるようチームとして取り組んでいます。

③富山 英紀 准教授

小児外科領域の診療を2015年に開始してから7年が経過し、当科での新生児を含めた小児外科治療も定着してきた。少子化が進む趨勢の中、他の外科診療グループに比し豊富な症例数とはいえないが、大学の小児科並びに近隣の病医院より紹介された先天疾患などの希少疾患の治療を各種行っている。当グループでは小児の健やかな成長のために本来の生理機能の確実な獲得と審美性を伴った上での安全性の両立を最大の目標としている。即ちいかに低侵襲に治療が行えるかが重要である。

④小児での低侵襲外科治療への試み

小児では成人の腹腔鏡手術の道具や手技がそのまま適応されることはその体格の小ささから極めて困難であるが、既に幾つかの疾患では内視鏡手術が導入され良好な成績をおさめている。一方で新生児から乳児においては多くの疾患で臍部のみを切開する小開腹手術が広く行われるようになり小児外科の専門施設では一般的になりつつある。審美性、低侵襲性の両面で優れており、当院の治療においても主流となっているが今後更に改良していき、より良い医療を患児に提供できるよう効果的な手技の定着を目指している。

⑤手術以外の治療手法への試み

以前から小児外科領域では漢方などによる保存的治療も治療の一つの柱である。消化管機能低下への大建中湯や六君子湯などでの治療や乳児痔瘻への排膿散及湯の内服に加え、近年では脈管奇形の1つであるリンパ管腫などへの治療も行われている。従来からのOK432を用いた硬化療法に加えて同治療も選択肢の1つとして当科でも使用しており、こういった新規治療の導入と効果の検証も今後行っていきたいと考えている。

④朝隈 光弘 講師

肝胆膵領域の外科手術は歴史的に高難度手術とされてきました。実際にひとたび合併症を起こすと救命出来ない症例もあります。まずはこの難しい手術を安全に行う事が何よりも優先されるべきとの考えで我々大阪医科薬科大学の肝胆膵班は努力してきました。先々代の谷川教授時代、先代の内山教授時代もその努力はこつこつと続けられ、現在、令和の李教授時代になり合併症率の低さはどこに出しても恥ずかしくないレベルになったと自負しております。肝胆膵領域の手術の工夫は様々な臨床研究と密接に関わっており、しかもそれは多施設で行うことでエビデンスレベルの高い研究として行われることが一般的です。当教室も他大学とも連携しエビデンスの発信を心掛けております。

一方で新たな手術、腹腔鏡手術、ロボット手術の導入も我々の使命と考えております。当然新たな手術にはこれまで積み上げた「やり方」を一回壊さないと出来ない側面があり、安全性をどう担保するかという問題が生じます。その点、我々の教室はこの20年日本の腹腔鏡手術を消化管で引っ張ってきた実績を有しており、外科医だけでなく、手術室看護師、技師のレベルは日本でも有数です。その経験を上手く肝胆膵高難度手術にスムーズに移行するべく取り組んでおります。これから入局してもらえ未来の肝胆膵外科医の先生たちが活躍する頃には肝胆膵手術のイメージは一新していると信じております。

アメリカでの基礎研究留学

松尾 謙太郎 准助教 平成22年卒

2021年2月から2022年3月の約1年間にわたり米国ニューヨーク州ニューヨーク市にありますDepartment of Surgery, Section of Colon & Rectal Surgery, Weill Cornell Medicine, New York Presbyterian Hospital で留学しておりました。

私の所属先は、ニューヨークのUpper East Sideという地域の68 St 沿いに位置しており、周囲にはMemorial Sloan Kettering Cancer Centerやロックフェラー大学など、世界的に有名な施設があるような地域です。研究室は、Minimally Invasive New Technology (MINT)という低侵襲手術の開発を目的とした研究組織であり、医師と多職種のstaffと意見や実際の臨床経験にもとづいたアイデアを共有し、患者への既存の治療戦略に対してより低侵襲な治療法や器具などを考え、そこで考え出したものをヒトの解剖に近いブタの腸管モデルを用いて実際に行いデータを蓄積し、従来の治療法と比較しいかに臨床応用できるかどうかの有効性、安全性などを評価しています。最近では、3Dプリンターを用いて我々独自の器具を作成し、器具として機能するかなどを評価する新しいプロジェクトにも取り掛かっています。常に患者への負担を減らすためにはどういうものがあるか、いかにして効率よくアプローチが可能になるのかなどを議論する姿勢につよく感銘を受けました。

海外留学は、最先端な研究に出会いその中で共に切磋琢磨した海外の友人もでき、これまで経験したことのない生活を体験することができます。しかし、その中には苦労もあります。ただ、その苦労も海外留学を選択したからこそ経験できるもので、貴重な財産、思い出になると考えております。海外留学に少しでも興味があるのであれば、次の一步目を大事にされたほうが良いと思います。その一步が自分の人生を大きく変えることでしょう。



先輩医師のコメント



葭山 亜希 令和2年卒

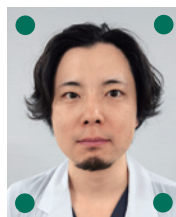
令和2年に福岡大学を卒業し、大阪公立大学医学部附属病院での2年間の研修を経て、9月まで県立加古川医療センターで内科専攻医をしておりました。一度内科を目指して専攻医を開始したのですが、学生の頃から持っていた外科への憧れが捨てきれず、思い切って内科から乳腺外科への転科を決意し、この度入局させていただきました。出身大学でも研修病院でもない病院でしたが、知人からの勧めで見学させてい

ただいた際に、先生方の熱心な診療、優しさ、医局の雰囲気の良いさに惹かれて、入局させていただくこととなりました。

乳腺外科は手術だけではなく、診断から治療までトータルで携わることができる点や、手術以外にも薬物療法や放射線療法など様々な治療法がある点が魅力的だと感じております。

大阪医科大学では手術はもちろん、薬物療法に関してもカンファレンスで検討し情報共有したりと知識を深めていくことができます。未熟な私にも先生方が丁寧に手術手技を教えてください、日々成長を感じることができます。

また、乳腺外科医は外科専攻医であり、消化器外科、小児外科、胸部外科のローテートが必要となっております。一般的に外科というと厳しい、忙しいというイメージがあったのですが、実際ローテートさせていただくと、先生方は熱心に優しく、ユーモアも交えて指導して下さり、忙しいことも忘れるほど楽しい毎日を過ごしております。外科医として必要な知識をつける貴重な場所でもあり、将来の自分の糧になっているなど日々感じております。カンファレンス、手術等では真剣な指導を受けつつも、医局では楽しい雰囲気でも先生方とお話することができ、本当に有意義な研修生活を送ることができると思っています。一般消化器小児外科・乳腺外科の医局員として、外科に興味のある方はぜひ見学に来ていただけると幸いです。お待ちしております。



久保 隆太郎 令和2年卒

2020年に近畿大学医学部を卒業し、大阪医科大学での2年間の初期臨床研修期間を経て当教室の魅力に触れ、後期研修医として入局するに至りました。

大学病院では多様な経歴と個性を持つ先生が多く在籍しておられるので、自分の理想像を掴みやすいという利点があります。また手術については腹腔鏡・胸腔鏡・ロボット支援下の術式に加えて、今や失われつつある開腹の技術も十分に学べるという特徴があります。

初期研修期間中はあらゆる科をローテートさせていただきましたが、入局してからはその全てが必要だったと思うほどの疾患に触れます。執刀はもちろん学術面や社会的な問題まで様々な経験ができますが、その都度、上級医の先生がたのフォローが手厚いというのも当教室の魅力の一つだと思います。特に緊急疾患では準備の時間が限られるので、この存在は非常に大きいと感じます。

一般的に外科というとキツイ・怖い・帰れないというイメージがありますが、その時代は終わりつつあると感じています。確かに決して楽な仕事ではありませんが、全員が矜持を持って働き、充実した日々を過ごしています。外科に興味がある方や、そうでない方も是非一度、当教室の魅力に触れてみてください。お待ちしております。

